

## 子供の夏の旅行に際して

小兒科竹内病院院長醫學士

竹 内 薫 兵

親に伴はれて避暑に赴く子供は外觀上實に幸福なものであるが、一方にはこれほど危険はないのである。何となれば近頃の避暑地といへば大抵都會人の集合地となつて居るから、放埒な避暑地氣分は飲食物の土にも現はれて、無攝生に飲んだり食べたりする。親なり周圍の者なりが飲食物に對する攝生を守らない如く自分の愛兒にもつい自分達の飲食物を與へる傾向がある。そのために小兒の胃腸の病氣はどうしても避暑地に於ては起こり易いと思はなければならぬ。これが危険の第一である。

又かくの如き土地であるから一旦傳染病でも發生すると其豫防機關のない爲めに速に周圍へ蔓延する。自宅では健全で丸々と太つて居た子供が、更に丈夫になるためにわざ／＼行つた避暑地先きで、運悪く傳染病に罹つたとした

らこれほど哀れむべき事はない。これが危険の第二である。それから傳染病ならずとも小兒には恐ろしい病氣がいくらかもある。避暑地先きで病氣が發して忽ち命を取られたりする子供がある。而かも決して少くないがそれは必しも傳染病ではないのである。さてそんな恐るべき病氣が發生した場合に避暑地の多くは醫治が迅速に的確に届く場所でないであります。急に子供が發病した。サア醫師は二三哩先きでなければならぬ。それもいつ來てくれるか判らない。と云つて賣藥は寶丹か風邪藥しかないといふ様な土地は珍らしくない。わざ／＼東京なり、其他の都會なりから醫師の來診を求めても、其醫師の到着する頃は落命するなどといふ悲惨事が少くないのである。これが危険の第三である。しかし避暑に行くのは危険ばかりかといふに決して然ら

す。他に眞似の出来ない長所があるから、われ／＼始め大賛成でお奨めしては居るが一面には危険のある事を注意しなくてはならぬ。そこで私は子供の病氣に關して夏心得べき二三を述べて親御達の御注意を促したいと思ふ。必しも避暑地に赴く親のみではない、一般に夏の旅行には小兒に對して注意して欲しい事柄である。

第一に藥を持參して出掛ける親があるが、これは愚の至りである。殊に子供のために熱の出た時の用心にといふので熱さましの藥。腹の下痢する時の用心にといふので下痢止めの藥、此の二つは誰しも持參して出掛けたがるが、私は賛成しかねる。それから消化の良くなる藥、胃腸を丈夫にする藥、水にあたらぬ藥などと、註文は數に出る。しかしいづれも賛成し難いのである。子供の病氣は、すべて熱が出たから熱さましを飲ませるとか、腹が下るソレ下痢止めの藥といふ具合に飲ませて治すべきものではないのである。加之こんな具合に藥を飲ませるのは何病か其診斷も何も判らずに藥を與へるので、丁度闇の中で矢鱈に刀を振り廻すと同様で、而かも其刀の刃は自分の方を向いてるか人の

方に向いてるか判らずにやる事で、劍呑千萬である。どうしても熱とか下痢とかいふ容體があつたら一刻も早く醫治を受けねばならぬ。醫師の来るまでの手當のつもりならばむしろ何も飲ませないがよろしい。あの迅雷的に突發する疫痢でさへ、疫痢と判斷がついてヒマシ油を飲ませるなら宜しいが、熱があるから疫痢になるといけない位の考へで熱が出たソレヒマシ油をと云つて飲ますのは必しも稱讚た話ではない。若し其熱が腸チフスの熱であつたり、盲腸炎の熱であつたりすれば、ヒマシ油を與へた事は、事によると大變を醸す事となるものである。

第二は乳飲み兒即ち哺乳兒の下痢である。母親の乳を飲んでての下痢はさのみ驚くには當らないが、若し人乳以外のものを飲んで、下痢して來たら急いで醫治を受けねばならぬ。しかもその大便が水様便であつたら成るべく早く歸宅した方がよいのである。これが進むと食餌性中毒症といふて殆ど全快しない病氣となつて終ふからである。此病氣にもいきなり下痢止め藥など飲ましてはいけません。

第三にはよく子供のやる大腸加答兒といふ病氣で、下痢

が突然と起こり而かも一日に十回二十回と随分と多い数の便通がある病氣ですが、子供の年齢が多い程治りはよいものですから、一概にあはてるには及ばないが、若し旅行先きが自宅へ近かつたら歸宅した方がよい。これから随分と重症に陥る事があるからである。

第四には疫痢といふ病である。この病氣は随分恐ろしい病氣であるだけ、今日では遍く人口に膾炙して居るがしかし相不變恐るべき病で、一夜にして愛兒を失ふ事は珍らしくないものである。どんな疫痢でも熱の出ない事はない、身體がぐつたりして勢が無くなり、大抵は突然痙攣や嘔吐を起こすものです。下痢はひどく頻繁の事はむしろ稀で、數回出るに過ぎない。出た便は青黒い粘液便で、一見尋常の便でない事が知られる。痙攣の早く治るのはよい印だが、いつまでも(數時間も十時間も)氣がつかないで、居るのは助からない事が多い。即ち惡徵である。こんな容體が一つでもあつたら母親始め周囲の者はヒマシ油を子供に與へるがよい。砂糖水の上へ浮かして、四五幾の子供ならヒマシ油を十二三乃至十五グラム位飲ましてよい。しかも四時間

位の後は又もう一度此分量のヒマシ油を飲ませ、頭へ氷枕をあてゝ成るべく早く醫師を迎へねばならぬものである。心得のある母親ならば腸を洗滌するがよい。しかし中々困難ならば早く醫治を乞ふ事にする外はない。しかし痙攣は一回だけで其儘落命するものではないから、痙攣だけで驚く事は要らない。四五歳のところは實に危險な病氣である。第五には赤痢である。これも更はよく子供のやる病氣です。高熱が出て來て、便が二十回も三十回もやる、即ちひどく下痢するのが特長である。この病氣に罹つたら食物を必ず制限しなければならぬ。おもゆなどはよく用ゐる。かつぶしスープもよい。腹巻きを行つて腹部を温めるもよい。安靜が第一だから危険は少い。しかし法定傳染病であるから警察署へ届出る義務が、治療した醫師にはあるのである。

第六には湯治場又は海水浴場へ赴く小兒が入浴したり、海水浴をしたがる事である。それはなるべく控へたがよい。よし入るにしても一日一回十分間を超えるのはよろしくないのである。(丁)